教養理念の再構築に向けて

我田広之
大阪大学大学院言語文化研究科助教授

公私のけじめの不在

ここ何年間か、私は学部の新入生を対象とする科目の最初の授業時に、次の三つのお願いをすることにしている。すなわち、教室に入る前に携帯電話の電源を切ること、授業中飲食しないこと、自分の出したゴミは自分で始末することの三点である。これを要するに、「公私のけじめをつけましょう」とのお願いなのであるが、公共の場とプライベートの場との区別がなくなり、男性も女性も子どもっぽくカジュアルになりすぎているこのご時世にあっては、「公私のけじめ」などという懇請も、いささか時代錯誤の感は否めないかもしれない。

けだし、親近以外の他人はすべて書き割り風景と見なし、公共の場においても文字通り傍若無人に振る舞う若者の態度には、人間関係の〈物象化〉が示されているだけで、確固とした個人の自立＝自律に裏打ちされた〈公私〉の観念は未成熟なままにとどまっている（この点に関しては、正高信男『ケータイを持ったサル』（中公新書）、澤口俊之・南伸坊『平然と車内で化粧する脳』（扶桑社）といった人類学者たちの所見が啓発的である）。もちろん、ここで〈公私〉の観念といっても、個の尊厳を認めずひたすら全体への奉仕を強制する「滅私奉公」を主張したいわけでは毛頭なく、むしろその対極として、自分が個として十分に尊重されるのと同様に他人も対等の人間＝パートナーとして配慮されるべきであるという心構えを改めて強調するのみである。そもそも〈公私〉は相関概念であり、プライベートな個人の確立と相互主体的な公共の感覚の成立とは、相即不離の関係にある。したがって、年度初めの授業において、私が三つのお願いでもってまず第一に注意を喚起したいのは、各自が大学教育の場において新たに〈公共性〉のセンスを涵養するという課題である。そして、この課題こそが、

教養の理念と深く結び付くのである。

伝統的教養理念の二義性

ところで、全学部生に一律に課される共通教育の目標が教養教育であるならば、そこでの教養とはいったい何を意味するのか。ここでは、大学制度の長い歴史を振り返って、さしあたり教養理念の二義性を指摘しておきたい。つまり、教養とは第一に学問の共通基礎としての一般的知識であり、これは西洋のリベラルアーツに由来している。次いで、教養には学問の究極の目的としての人格の陶冶、普遍的な人間の育成という意味がある。これは18世紀の新人文主義、ドイツ観念論の人格主義に基づくものであり、学問を通じて理性的存在としての人間形成が達成されるという、ある意味で非常に幸福な理念・理想を掲げることができた時代の名残である。

この教養の理想においては、常識もしくは良識（コモンセンス）の体得、すなわち、市民社会の一員としてみんなが共通に有しているものの見方・考え方を身につけなければならないが、ただそれだけでは不十分で、もうひとつには、「分別」とか「判断力」とか「批判」精神というものの涵養が必要となる。これらの能力の基本には「分ける」というはたらきがあり、結局のところ、教養とは、世の中のものごとの真偽・善悪・美醜を区別する能力を養成するという動的過程なのである。

現代日本における教養教育

それでは、戦後の日本において、リベラルアーツが新制大学の理念とされ、ほとんどの大学に一般教養教育が導入されたにもかかわらず、1991年に文部省が大学設置基準を大綱化し、カリキュラムを弾力化するやいなや、多くの大学が教養部を廃止して専門教育の充実へと走ったのは、なぜなのか。その原因については、いろいろと議論されてきた。曰く、一般教養の教育内容が高校の授業の延長レベルだったから。曰く、教養部は旧制高校や旧制師範などの教員の受け皿として使われ、専門課程との連携が希薄だったから。曰く、担当する教員が特定分野の専門家であり、人文・社会・自然の三分野のつながりについて、だれもきちんと論じることができなかったから云々。要するに、上で述べた教養の理念が、制度化される中で実質的に空洞化・矮小化を来たし、個別的知識の多寡へと〈物象化〉され、端的に破綻していたからである。その意味では、逆に教養部が40年以上も慢性疲労惰性体として存続しえたことの方が、驚きかもしれない。

しかるに、大学進学率がほぼ50%に達し、高等教育の大衆化が進むにつれて、最近で

は大学生の学力低下が指摘され、学生の教養の乏しさが学部・大学院の専門教育にとっても障害だと認識されるようになった。改めてリベラルアーツの定義を問い直す声があちこちで発せられ、私の勤務する大阪大学においても、自主的な学習意欲を高め、幅広く深い教養と総合的な判断力を養うために、共通教育のあり方が全学的に検討されている。教養教育はいわば「未完のプロジェクト」として、その存在意義をいま一度主張するようになったわけである。

新たな教養理念の要請

では、いまなお大学の使命の第一義が、高度の専門的知識・技能とともに、市民社会の一員としての良識と的確な判断力を備えた人材の育成にあるとすれば、教養理念の再構築に向けて、私たちは何を課題とすべきだろうか。ここでは、先述の教養理念の二義性に対応して、〈総合性〉と〈公共性〉というキーワードを掲げたい。

まず、〈総合性〉とは、学問の有機的な統一性の謂いであり、総合大学で教育研究される諸学が全体的な統一性を有するという理念である。そうした知の全体性を志向する学際的超域的思考能力は、本来大学入学以前から養成されるべきものであり、初等教育の現場においても、近年ものごとの関連性・総合性に焦点を当てた「ホリスティック教育」が提唱され、また「総合的な学習」の実践が蓄積されていることは喜ばしい。

もうひとつの〈公共性〉というキーワードについては冒頭でも触れたが、私たちはただ内面的自己完成を目指す個人主義的教養概念を乗り越え、自己形成が同時に外的な社会全体のより良い建設に通じるような意識的知的実践としての教養概念を新たに模索しなければならない。このようにみずからを取り巻く自然と社会の環境＝生活世界との対話能力を高め、開かれた社会性を身につけようとする心構えが、新たな〈教養〉として切に要請されているのではあるまいか。

以上、かつて1983年から10年間にわたって図書館情報大学に奉職し、その間筑波大学においても非常勤講師としてドイツ語その他の授業科目を担当した者の所感を開陳させていただいた次第である。

（わがた　ひろゆき／ドイツ思想史）